

2021/03/21

ヨハネの福音書 講解メッセージ⑫

『主の山には備えがある』（ユダの裏切り）ヨハネ 13:18-13:38

■神は備えておられる

「わたしは、あなたがた全部の者について言っているのではありません。わたしは、わたしを選んだ者を知っています。しかし聖書に『わたしのパンを食べている者が、わたしに向かってかかとを上げた』と書いてあることは成就するのです。わたしは、そのことが起こる前に、今あなたがたに話しておきます。そのことが起こったときに、わたしがその人であることをあなたがたが信じるためです。」(ヨハネ 13:18-19)

イエス様は、弟子たちの足を洗い、「あなたがたも互いにそうすることで祝福を受ける」と話されました。しかし、その時に「それは、あなたがた全部の者について言っているのではない」と、この中に裏切る者がいることを示されました。

「わたしを選んだ者」とは、神の呼びかけに応答し、救われた者のことです。神様が、救う人と救わない人を選び分けているのではなく、その御手はすべての人に差し伸べられています。そして、『わたしのパンを食べている者が、わたしに向かってかかとを上げた』とは、「救い主は裏切りを受ける」という旧約聖書の預言です。このように、イエス様の行動の多くが、旧約聖書で預言されており、すべてが備えられたことだとわかります。イエス様がここでこの預言を引用されたのは、「その救い主は私だ」ということを示すためです。事前に話しておくことで、後に弟子たちが信じられるように備えてくださったのです。それは、やがて弟子たちは、このことによって、自分の罪に気づけるということです。罪に気づかなければ、私たちは神に依り頼む者になりません。

■神はあきらめない

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしの遣わす者を受け入れる者は、わたしを受け入れるのです。わたしを受け入れる者は、わたしを遣わした方を受け入れるのです。」(ヨハネ 13:20)

イエス様は、神が遣わした者を信じるのが、神を信じることで何度も言われました。なぜイエス様は、すでにイエス・キリストを信じている弟子たちに、あえてこのことを繰り返されたのでしょうか。それは、この12人の中に、まだイエス様を信じていない者が一人いたからです。イエス様は、ユダを救おうとして呼びかけておられるのです。「悪魔はすでにシモンの子イスカリオテ・ユダの心に、イエスを売ろうとする思いを入れていた」(ヨハネ

13:2) とあるように、ユダの中には、すでに神と異なる思いがありました。しかし、ユダ自身、それを選択すべきかどうかまだ決めていません。イエス様はユダが裏切ることがわかっていたようですが、それをよしとしておられるわけではなく、なんとしても救いたいと願って、「私を信じなさい」と呼びかけをしておられるのです。

私たちはロボットではなく、私たちは自分で考えて選択するように造られています。精神とは、私たちの中にある神のいのちに体が持ち込む情報が刺激となって、生まれるものです。精神が機能するためには、魂と体を必要とします。魂とは、神様が与えてくださった神のいのちで、人は神のいのちに生かされている存在であると言えます。この精神に語りかけるには、必ず精神を生じさせている体か魂を通過します。悪魔であっても神であっても、私たちの精神を直接コントロールすることはできません。神様は神のいのちである魂に呼びかけ、悪魔は神と異なる情報を与え、人の選択を待ちます。

今は、悪魔は滅ぼされているので、悪魔が私たちに働きかけることはありません。しかし、死が入り込んでいるので同じことが起こります。死の恐怖によって、見える安心を求めよという、まったく神と異なる情報が私たちの中に存在します。自分の可能性が自分の神になり、まことの神様からそれた生き方になってしまうことが起こります。ですから、いずれにしても、私たちは、神からの情報と体が持ち込む情報のどちらを選択するのか、というところに立たされているのです。

さて、ユダはイエス様のことばに応答しませんでした。イエス様の最後の呼びかけをユダが拒否した瞬間、イエス様は霊の激動を感じ、次のように言われました。

「イエスは、これらのことを話されたとき、霊の激動を感じ、あかしして言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。あなたがたのうちのひとりが、わたしを裏切ります。」」（ヨハネ 13:21）

ユダが応答しなかったことが、イエス様にとって、霊の激動を感じる出来事だったのです。イエス様は、最後の最後まで決してあきらめることはなさいません。たとえ間違った道に行くことがわかっても、御手を差し伸べ続けられます。人にとっては無駄だと思っても、人を助けようとするのを、神様は無駄なことだとは思われないのです。

■誰が裏切るのか

「弟子たちは、だれのことを言われたのか、わからずに当惑して、互いに顔を見合わせていた。弟子のひとりで、イエスが愛しておられた者が、イエスの右側で席に着いていた。そこで、シモン・ペテロが彼に合図をして言った。「だれのことを言っておられるのか、知らせなさい。」その弟子は、イエスの右側で席に着いたまま、イエスに言った。「主よ。それはだれですか。」（ヨハネ 13:22-25）

弟子たちは皆、イエス様を裏切るのは自分ではないと思っています。これが私たちの傲慢です。「自分かもしれない」と思うと用心しますが、「私は大丈夫だ」と思っているときは、危険な時です。誰が悪いのかと犯人捜しをするのではなく、自分が当事者かもしれないと、へりくだることができる人は幸いです。

「イエスは答えられた。「それはわたしがパン切れを浸して与える者です。」それからイエスは、パン切れを浸し、取って、イスカリオテ・シモンの子ユダにお与えになった。彼がパン切れを受けると、そのとき、サタンが彼に入った。そこで、イエスは彼に言われた。「あなたがしようとしていることを、今すぐしなさい。」席に着いている者で、イエスが何のためにユダにそう言われたのか知っている者は、だれもなかった。ユダが金入れを持っていたので、イエスが彼に、「祭りのために入用の物を買え」と言われたのだとか、または、貧しい人々に何か施しをするように言われたのだとか思った者も中にはいた。」(ヨハネ 13:26-29)

「ユダにサタンが入った」とは、悪魔が持ち込んだ情報を自分のものとして食べたということです。罪とは、神と異なる思いを食べることです。イエス様は、ユダを助けたいと願いましたが、ユダはそちらを選択することができませんでした。ユダが決断したことをイエス様は霊的に感じ取ったので、「あなたがしようとしていることを、今すぐしなさい。」と言われました。しかし、このイエス様とユダの会話の意味は、誰にもわかりませんでした。二人の間だけで緊迫したやり取りが行われていたのです。

■神の栄光

「ユダは、パン切れを受けるとすぐ、外に出て行った。すでに夜であった。ユダが出て行ったとき、イエスは言われた。「今こそ人の子は栄光を受けました。また、神は人の子によって栄光をお受けになりました。」(ヨハネ 13:30-31)

イエス様は重大な出来事がある時、よく過去形で語られます。たとえば、ラザロの復活の時も「祈りは聞かれました」と、過去形で祈りました。これは非常に強い信仰の告白です。これから来る最大の患難に対して、「栄光を受けた」と言われたのです。つまり、患難は神の栄光なのです。それは、神は光としてこの地上に来られたからです。やみがなければ、光がわかりません。人々はまだイエス様のことを認めていませんでしたが、これから来るやみによって、光に気づくのです。

イエス様は、十字架につけられるという患難を通して、悪を滅ぼし、死を滅ぼし、その証しとして3日後によみがえられました。患難を通して、希望が輝くのです。このことを先取りして、イエス様は「栄光を受けた」と宣言なさったのです。私たちも患難にぶつかった時、つらさを主に告白して助けを求める祈りから、さらに一歩進んで「祈りは聞かれた」「栄光を

受けた」という信仰の祈りができれば幸いです。

「神が、人の子によって栄光をお受けになったのであれば、神も、ご自身によって人の子に栄光をお与えになります。しかも、ただちにお与えになります。」(ヨハネ 13:32)

イエス様は「栄光を受けた」と告白した直後に、「栄光を受ける」と未来形を使っておられます。つまり、「栄光を受けた」という「信仰」によって、「栄光を受ける」という「事実」を受け取るのです。

「子どもたちよ。わたしはいましばらくの間、あなたがたといっしょにいます。あなたがたはわたしを捜すでしょう。そして、『わたしが行く所へは、あなたがたは来ることができない』とわたしがユダヤ人たちに言ったように、今はあなたがたにも言うのです。」(ヨハネ 13:33)

イエス様は、十字架に架かってよみがえった後、天に帰られます。この「神が見えなくなる」ということが、実は、神の義であり神の栄光なのです。なぜなら、このことによって、自分の力でイエス様のもとに行けなくなり、イエス様のところに行くには、信仰によって神様に引き上げていただくしかなくなるからです。このことに気づかないと、バベルの塔を築くように、自分の力で神のもとに行こうとしてしまいます。

今まで弟子たちは目の前のイエス様に見ていただくとして、行いによって神に近づこうと競っていました。しかし、私たちが神のもとに行くには、神の差し伸べてくださる御手をつかむしかないので。これが、信仰による神の義です。このことがわかると、アダムとエバがエデンの園から追放された意味がよくわかるようになります。旧約聖書は新約聖書の影です。アダムとエバが追放されたのは、罰ではありません。自分の力では神に到達できなくなることで、信仰によって神に到達する道を開いてくださったのです。つまり、エデンの園からの追放は、イエス様の十字架を示した神の義の型なのです。

神は怒りによって罪を罰するような方ではありません。ユダに御手を差し伸べられたように、最後まで私たちを助けようとする方です。信じた者を助ける方法は、罪を洗い流すしかありません。それは、不信仰を取り除き、信仰を育てるということです。そのためには、イエス様の姿が見えないほうがよいのです。

■罪に気づくための備え

「あなたがたに新しい戒めを与えましょう。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。もし互いの間に愛があるなら、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。」(ヨハネ 13:34-35)

愛し合うとは、仕える者になるということです。イエス様は、互いに仕えるということは、「さばかないこと」と教えていらっしゃいます。まずは、互いに怒らず、さばき合わないことから始め、次に自分にできることを探しましょう。そうすることで、キリストの弟子であることを人が認めるようになっていわれています。

「シモン・ペテロがイエスに言った。「主よ。どこにおいでになるのですか。」イエスは答えられた。「わたしが行く所に、あなたは今はついて来ることができません。しかし後にはついて来ます。」ペテロはイエスに言った。「主よ。なぜ今はあなたについて行くことができないのですか。あなたのためにはいのちも捨てます。」イエスは答えられた。「わたしのためにはいのちも捨てる、と言うのですか。まことに、まことに、あなたに告げます。鶏が鳴くまでに、あなたは三度わたしを知らないと言います。」（ヨハネ 13:36-38）

イエス様は、ペテロに「今はついてくることはできないけれど、あなたは永遠のいのちを持っているので、死後、また私について来られるようになる。」と言われました。ペテロは、「今だって、あなたのために命を捨てます。」と告白しましたが、イエス様は、ペテロがそうできないことがわかっていたので、「鶏が鳴く前に、私を知らないと言え。」と答えられました。イエス様が、このことを伝えたのは、あとから、ペテロが自分の罪に気づくためです。つまり、神はペテロを救い出すために、ペテロが罪に気づくよう備えておられるのです。

これは、アダムとエバの場合にも同じことが言えます。なぜ神が、園の中央の木の実を食べてはいけないと命じたのか、それは、神の言葉を思い出して、罪に気づくためです。神様は、アダムとエバが罪を犯すことがわかっていたので、本人が後から罪を自覚できるように、「食べてはいけない」とあらかじめ伝えておられたのです。

罪とは律法に違反することですが、その本質は、神と異なる思いを食べてしまうことです。悪魔が神と異なる思いを持ち込むことは、神様にはわかっていました。しかし、それだけでは、彼らは自分たちが何をしたかわからないので、あらかじめ律法を与えておくことで、罪に気づくことができるようにしたのです。つまり、神は、人間を救うために、律法を用意なさったのです。

■律法の役割

「というのは、律法が与えられるまでの時期にも罪は世にあったからです。しかし罪は、何かの律法がなければ、認められないものです。」（ローマ 5:13）

律法が与えられる前から、罪はこの世に存在しました。しかし、律法がないと、それが罪かどうかわかりません。悪魔のせいで罪は生まれ、罪のせいで死が入り込みました。悪魔が

滅ぼされた今は、死が、私たちに神と異なる情報を持ち込みます。神様は、「私を信頼しなさい」と教えておられますが、死の恐怖が、「見える安心をむさぼれ」という、神とまったく異なる情報を与えます。もし、律法がなければ、私たちは、見える安心をむさぼることが罪だとはわかりません。しかし、神の律法が与えられたことによって、このむさぼりが偶像礼拝であって罪なのだとわかるのです。神様は悪魔がアダムとエバに罪を犯させることもわかっていました。神様に語られていたことばによって、二人は罪を自覚し、神に立ち返ることができたのです。そして、悪魔は十字架で滅ぼされました。

悪魔の起源について、聖書は沈黙しています。聖書が沈黙していることを探ってはいけません。それは、ただの想像です。そうして、自分で勝手に教理を作ってしまうのです。私たちは理性には限界があることを知るべきです。神を知るとは、理性でも知性でもなく、信仰です。私たちの知性では疑問しか生まれてきません。

「しかし、罪はこの戒めによって機会を捕らえ、私のうちにあらゆるむさぼりを引き起こしました。律法がなければ、罪は死んだものです。」(ローマ 7:8)

律法がなければ、罪は明らかになりません。神様は、私たちが罪に気づくようにあらかじめ備えをしておられるのです。律法は私たちの中に潜んでいた罪をあぶりだします。それは、神様が罪をいやすためです。それが律法の役割です。

「あなたがたの会った試練はみな人の知らないものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを、耐えられないほどの試練に合わせることはなさいません。むしろ、耐えられるように、試練とともに脱出の道も備えてくださいます。」

(I コリント 10:13)

患難とは、ただの苦しみではなく、神が備えられた脱出の道を知るためのものです。神様は、アダムとエバに対しても、ユダに対しても、ペテロに対しても、患難の前に先手を打って、罪に気づくようにしてくださいました。こうして、後から神の栄光が現されるのです。あなたが患難に出会うとき、神様は必ず先手を打って、脱出の道を備えていらっしゃいます。期待して祈り、見つけ出しましょう。